

聚分韻略の右音注と文明本節用集との比較

— 曾撰と梗撰を中心に —

李承英*

目次

1. はじめに
 2. 聚分韻略と文明本節用集の音注状況
 3. 『慶長版』の右音注と『文明本節用集』との比較
 - 3.1 曾撰
 - 3.2 梗撰
 - 3.3 両書の音形の分布状況
 4. 『慶長版』の右音注の漢字音系統
 5. 終りに
-

1. はじめに

『聚分韻略』は1306（嘉元4）年の自序、1307（徳治2）年の一寧一山の跋を持つ、高名な臨済僧虎関師錬（1278～1346）の著である。ただし原本は伝わっていない。この書は後代、形式上もっとも根本的な所において改変が行われた。中世鎌倉時代14世紀から室町時代を経て、近世江戸時代末19世紀に至るまで、実に頻繁に写され、また版行された。その間に増補改編も幾度となく行われた。いずれにしても、この書ほど文字通り日本一頻用され愛用された韻書はほかにない。

また、この書は、漢字を四声及び206韻に分けた後、意義分類をし、簡単な漢文の注を加えてある。そして、多くのものには見出し字の右側と左側に片仮名で系統の違

* 釜山大学校 韓国民族文化研究所 研究教授

う音を付している場合が多い。それは、呉音漢音の系統のものと唐音とに分かれる。

『聚分韻略』の付加音訓の特徴の追究や日本語史的研究に関しては、今日まで音つまり呉音漢音唐音の研究が若干行われている(奥村1973・湯沢1987・李2007)程度である。まず、奥村(1973)では、右側の仮名音注(以下、右音注とする)の漢字音について、呉音漢音が入り交ざっているとは指摘されているものの、その実態についてはあまり触れてないのが現状である。湯沢(1987¹⁾)では、左側の仮名音注、つまり唐音カナについて、『唐音の研究』でその全体像がほぼ明らかにされている。李(2007)は、『聚分韻略』と当時の五山系抄物の呉音、漢音と比較し、右音注について、呉音と一致しているものが多いとしている²⁾。しかし、これは、五山系の抄物での呉音漢音の認定の仕方が当時において特別だった可能性も十分有り得る。

そこで、当時の呉音漢音が明確に示されている『文明本節用集』³⁾の呉音漢音との比較が必要とされる。

このような点に着目し、本稿では、『聚分韻略』の右音注の字音の系統を検討するために、呉音と漢音の対立が顕著に見られる曾撰と梗撰⁴⁾を中心に『文明本節用集』の呉音漢音と比較し、その実体を明らかにしていきたい。

1) 湯沢(1987)は『中原音韻』や現代呉地方言との比較対照を通して中世唐音の特徴を述べ、その原音自体の中国語音韻史におけるおおよその位置を追っている。また、『聚分韻略』『略韻』の二種の唐音資料をとりあげ、その唐音の、中世唐音としての特色の把握、およびその資料的価値を明らかにしている。そして、『慶長版』の字音加点について、呉音・漢音注はほぼすべての標出字に加えられているのに対し、唐音注は加えられていない場合が少なくなく、もともと無加点と解すべき事例もあるとしている。詳しいことは湯沢(1987) 参照。

2) 李(2007)での結果を具体的に示すと、『慶長版』と五山系抄物において漢音と一致しているのは59.1%、呉音と一致しているものは21%、呉音漢音の両方と一致していないものは7%あるとしている。

3) 『文明本節用集』(1474)は禅僧によって編纂されたとするもので、数ある『節用集』中、最古の『節用集』の一つである。そして漢字漢語の注に墨筆と朱筆が存するが、各々呉音と漢音・唐音の書き分けがあること、清音に読むべき旨の不濁点の表示、標出語の声点表示など、室町時代の和音、字音、清濁の実体などを知る上で極めて重要な文献である。

4) 曾撰と梗撰は下のように、韻母の違いで呉音と漢音の対立が見られる代表的な撰であるので、ここでは、曾撰と梗撰を中心に検討することにする。

	呉音	漢音
梗韻	—au	—ei
	—ai	—ei
曾韻	—o	—ou

2. 聚分韻略と文明本節用集の音注状況

撰述と同時に改版されたものと推定される『聚分韻略』には、数多くの版本、写本のあることが知られている⁵⁾(奥村, 1973)。その中で、本稿では、字音付刻年代が明白なものとしては最古の『慶長十七年版』を用いる。『聚分韻略』諸本における慶長十七年版一以下、慶長版と略称する一について、奥村(1973)は慶長版の現存本はいずれも手慣れのあとが著しく、また、付刻カナの不鮮明なものが多いが、便利な付訓本としてよく用いられたとしている

『聚分韻略』にはもともと当該掲出漢字の意味を示す漢字注しかなかった。そこに、音や訓を表す仮名注も書き加えられるようになった。これは明らかに『聚分韻略』に漢和辞典的な性格が付け加えられたこと、つまりその日本化の深まりを反映している。付加の年代についてはまだよく考察がなされていないが、室町時代書写と見られる、あるいは版行になる『聚分韻略』の場合は、その仮名の字体や、加点唐音が鎌倉時代成立の禅宗や泉涌寺で盛んに用いられていた中世唐音であること、総じて四つ仮名や開合の混同が余り見られないことなどから、おそらく書写や出版年と同じか、あるいはそれをさほどくだらない頃、つまり室町時代以前だったと推定される。なお、先に述べたように、最初の音訓の付刻1612(慶長17)年版においてなされたことや、その後の版本は付刻が一般的になったことなどは、漢和辞典的性格の付加は慶長版以前から行われており、それが慶長版になって決定的になったことを示唆している。

湯沢(1987)では、『慶長版』の字音加点について、標出字の右側に呉音・漢音、左側に唐音があるとし、呉音・漢音注はほぼすべての標出字に加えられているのに対し、唐音注は加えられていない場合が少なくないとしている。以下、『慶長版』の仮名音注の状況をみると、

曾撰 シン蒸セウ(五十六丁)
 テン等トウ(五十六丁)
 ネン能ノウ(五十六丁)

5) この書は後代、形式上も最も根本的な所において改変が行われた。そして、それにちなんで『三重韻』と呼ばれるようになった。中世鎌倉時代14世紀から室町時代を経て、近世江戸時代末19世紀に至るまで、実に頻繁に写され、また版行された。その間に増補改編も幾度となく行われた。余りにもその写本版本の種類や改編版行の回数などが多いためであろう、例えば奥村三雄の労作(1973)においても、またその後においても、書誌的にはなおその全容どころかその半分すら明らかにされていない。

梗撰 シン姓セイ (五十一丁)
 アン行カウ (五十二丁)
 チン頂チャウ(五十四丁)

のように、右側には「チャウ」のような呉音加点も、「セウ」「トウ」「ノウ」「セイ」「カウ」のような漢音加点もあるが、左側には「シン」「テン」「ネン」「シン」「アン」「チン」唐音加点のみである。

一方、『文明本節用集』は国立国会図書館蔵本が唯一の現存本である。『文明本節用集』の字音体系は、基本的に色分けと位置の違いという二点によって区別される。色分けから見ると、墨筆音注は呉音と訓、朱筆音注は漢音と唐音を表す。位置の違いから見ると、呉音、唐音は見出し字(語)の右側に、漢音は右側左側両方に現れている。朱筆音注に現れている唐音は、一部の文物名に用いられており、漢音より数がずっと少ない。それを朱筆のかなはカタカタで、墨筆のものはひらかなで示す。

へイ 評 ひやう (1041-8)
 テイ 定 ぢやう (1041-8)
 セイ 青 しゃう (45-5)
 セイ 性 じやう (635-2)

両書を比べると、『慶長版』は、『文明本節用集』のような色分け表記こそないが、位置の違いによって、漢呉音と唐音を区別している点において、『文明本節用集』と対照的である。

特に、『慶長版』の唐音加点は見出し字の左側に施されているのに対して、『文明本節用集』の唐音は、漢音と同じ朱筆で見出しの右側に加点されており、漢音(朱筆)と呉音(墨筆)との区別ほどはっきりしない。

3 『慶長版』の右音注と『文明本節用集』との比較

本節では、『聚分韻略』の右音注の字音の系統を検討するために、呉音と漢音の対立が顕著に見られる曾撰と梗撰を中心に『文明本節用集』の呉音漢音と比較する。

3.1 曾撰

『慶長版』の曾撰は全部103字であるが、その中で『文明本節用集』の呉音と漢音が見出せたのは42字である。以下、『慶長版』右音注と『文明本節用集』における呉音・漢音を比較した結果を韻別に示すと、次の【表1】となる。

【表1】曾撰の比較

韻目	標出字	聚分韻略		文明本	
		右音注	左音注	漢音	呉音
登	弘	コウ	イン	コウ	グ
	恒	コウ	イン	コウ	
	曾	ソウ	シン	ソウ、ソ	ソ
	增	ソウ	セン	ソウ	
	僧	ソウ		ソウ	
	憎	ソウ		ソウ	
	棚	ホウ		ホウ、ハウ	
	崩	*ヘウ	ヘン	ホウ	
	棚	ホウ	ヘン	ホウ	
	朋	ホウ	ヘン	ホウ	
	藤	トウ	テン	トウ	
	登	トウ		トウ	ト
	灯	トウ	テン	トウ	
騰	トウ		トウ		
等	等	トウ		トウ	
	登	トウ	テン	トウ	ト
	贈	ソウ		ソウ	
	能	ノウ	子ン	ノウ	ノ
蒸	菱	レウ		レウ	
	綾	レウ		レウ	
	陵	レウ	リン	レウ	
	凌	レウ	リン	レウ	ノウ
	応	ヨウ		ヨウ	ヲウ
	鷹	ヨウ		ヨウ	ヲウ
	競	*ケイ	キン	キヨウ	
	興	キヨウ	イン	キヨウ	コウ
	升	シヨウ	シン	シヨウ	
	称	シヨウ	シン	シヨウ	
	称	シヨウ	シン	シヨウ	
	承	セウ		シヨウ	
	昇	セウ	シン	シヨウ	

	蒸	セウ	シン	シヨウ	
	氷	ヒヨウ		ヒヨウ	
	綾	レウ		レウ リヨウ	
証	乘	シヨウ	シン	シヨウ	
	烝	セウ	シン	シヨウ	
	勝	シヨウ	シン	シヨウ	
	証	シヨウ	シン	シヨウ	
	剩	シヨウ	シン	シヨウ	
	徵	テウ	シン	チヨウ	
	懲	テウ	シン	チヨウ	
	澄	チヨウ	シン	チヨウ	

* 仮名遣いは原文に従う。例えば、ヲ エ、子(ネ)はそのまま写し、そして拗音のヤ、ユ、ヨは大文字のままにして小文字に書き換ええない。

* 今回は『慶長版』左側の仮名音注(唐音)は問題としないことにするが、参考までに掲げておいた。

『慶長版』の曾撰の42字を『文明本節用集』の字音と比較すると、その40字が『文明本節用集』の漢音と一致、2字が不一致である。

『慶長版』では、蒸韻の「承」「昇」「蒸」、証韻「烝」の場合、「セウ」となっているが、『文明本節用集』では「シヨウ」の拗音となっている。また、証韻「徵」「懲」の場合も「テウ」となっているが、『文明本節用集』では「チヨウ」の拗音となっている。これは、当時-eu>-jo:となる時期で、まだ混同していると見られるので、ここでは仮名遣いの問題として両者は同一の音と見なす。

不一致のものは、登韻の「崩」、蒸韻「競」2字だけで、『慶長版』では「へウ」「ケイ」、『文明本節用集』で漢音の「ホウ」「キヨウ」となっている。「崩」「競」は、『倭玉篇』では、「ホウ」(360-6)「キヨウ」(50-3)となっており、『文明本節用集』漢音と一致している。

結局、曾撰の場合、『慶長版』の右音注は、不一致の2字を除くと、すべてのものが『文明本節用集』の漢音と一致しているので、『慶長版』は漢籍を読むための漢音を積極的に表示している書と考えられる。

3.2 梗撰

『慶長版』の梗撰は全部400字であるが、その中で文明本の呉音と漢音が見出せたのは151字である。以下、『慶長版』右音注と『文明本』の呉音・漢音をそれぞれ韻順に示し具体的に検討する。

【表2】 梗撰の比較

韻目	標出字	聚分韻略		文明本	
		右音注	左音注	漢音	呉音
庚	更	カウ	カン	カウ	
	庚	カウ	カン	カウ	
	行	カウ	アン	カウ	
	衡	カウ	アン	カウ	
	賡	カウ	カン	カウ	
	彭	ハウ	ハン	ハウ	
	英	エイ	イ	エイ	
	榮	エイ	イン	エイ	
	瑩	エイ	イン	エイ	
	兄	ケイ	ヒン	ケイ	キヤウ
	京	ケイ	ナン	ケイ	キヤウ
	卿	ケイ		ケイ	キヤウ
	蚩	ケイ	イン	ケイ	
	迎	ケイ		ケイ	
	驚	*キヤウ	キン	ケイ	キヤウ
	鯨	ケイ	キン	ケイ	
	檠	ケイ	キン	ケイ	
	荊	ケイ	キン	ケイ	
	笙	シヤウ	サン	シヤウ	
	生	セイ	サン	セイ	シヤウ、ジヤウ
	兵	ヘイ		ヘイ	ヒヤウ
	丙	ヘイ		ヘイ	
	平	ヘイ	ヒン	ヘイ	
柄	ヘイ		ヘイ	エ	
盟	メイ	ミン	メイ		
盲	*ハウ	マン	マウ		
獍	*ナウ	トン	ニヤウ		
梗	梗	カウ		カウ	
	鸚	アウ	アン	アウ	
	桜	*イヤウ	アン	アウ	
	亨	キヤウ		キヤウ	
	境	*キヤウ		ケイ	キヤウ
	杏	キヤウ	アン	キヤウ	チヤウ ヂヤウ
	孟	*ミヤウ	マン	マウ	ミヤウ
	箏	*サウ	サン	シヤウ	
	影	エイ		エイ	ヤウ
横	クワウ	ワン	クワウ		

	鉞	クワウ		クワウ	
	紘	クワウ	カン	クワウ	
	永	エイ		エイ	
	詠	エイ		エイ	
	景	ケイ		ケイ	ケ
	警	ケ井	キン	ケイ	
	競	ケイ	キン	ケイ	
	省	セイ		セイ	
耕	耕	コウ		カウ	
	轟	カウ	カン	カウ	
	噌	ソ		ソ	
	争	サウ	サン	サウ	
	莖	*キヤウ	カン	ケイ	
	宏	*カウ	ワン	コウ	
	薨	マウ	マン	マウ	
	棚	*ハウ	ハン	ホウ	
	膨	*ハアウ	ハン	ハウ	
	抨	*ハウ	ハン	ヘイ	
	萌	*マウ	マン	ハウ	
映	竟	ケイ		ケイ	
	孟	マウ	マン	マウ	
	映	エイ		エイ	
	命	メイ	ミン	メイ	
	柄	ヘイ	ヒン	ヘイ	エ
清	晶	シヤウ		シヤウ	
	营	*エイ		エ	
	盈	エイ	イ	エイ	ヤウ
	瓔	エイ	イン	ヤウ エイ	
	纓	エイ	イン	エイ	
	嬰	エイ		エイ	
	輕	ケイ		ケイ	キヤウ
	声	セイ	シン	セイ	シヤウ
	清	セイ		セイ	シヤウ
	精	セイ		セイ	シヤウ
	晴	セイ	シン	セイ	シヤウ
	誠	セイ		セイ	シヤウ
	征	セイ	シン	セイ	
	頃	*ケイ	キン	キヤウ	
頸	ケイ	キン	ケイ		
傾	ケイ	キン	ケイ		

	請	*シヤウ		セイ	シヤウ
	程	テイ		テイ	
	貞	テイ	シン	テイ	チヤウ ヂヤウ
	呈	テイ	シン	テイ	
	醒	テイ	シン	テイ	
	屏	*ヒヤウ	ヒン	ヘイ	ヒヤウ
	令	レイ	リン	レイ	リヤウ
静	静	セイ		セイ	シヤウ
	井	セイ		セイ	シヤウ
	鯖	セイ	シン	セイ	
	逞	テイ	シン	テイ	
	嬰	エイ	イ	エイ	ロ
	餅	ヘイ		ヘイ	
	嶺	レイ	リン	レイ	
青	刑	ケイ	イン	ケイ	キヤウ
	形	ケイ	イン	ケイ	キヤウ
	馨	ケイ	キン	ケイ	
	経	ケイ	キン	ケイ	キヤウ
	庭	テイ	チン	テイ	
	丁	テイ	チ	テイ	チヤウ ヂヤウ
	廳	*チヤウ		テイ	チヤウ ヂヤウ
	停	テイ	チン	テイ	チヤウ
	町	テイ	チン	テイ	チヤウ ヂヤウ
	釘	テイ		テイ	
	挺	テイ		テイ	チヤウ
	廷	テイ		テイ	
	寧	ネイ		ネイ	
	嚶	ネイ		ネイ	
	暝	メイ		メイ	
	冥	メイ		メイ	ミヤウ
	零	レイ		レイ	リヤウ
	冷	レイ	リン	レイ	リヤウ
	醒	セイ		セイ	
	腥	セイ	シン	セイ	
	瓶	ヘイ	ヒン	ヘイ	
	并	*ヒヤウ	ヒン	ヘイ	
	萍	ヘイ	ヒン	ヘイ	
鳴	メイ	ミン	メイ	ミヤウ	
銘	メイ	ミン	メイ		

	伶	レイ	リン	レイ	
	鈴	レイ	リン	レイ	リヤウ
	聆	レイ	リン	レイ	
	鶴	レイ	リン	レイ	
	齡	レイ	リン	レイ	
	翎	レイ	リン	レイ	
諍	諍	シヤウ	サン	サウ シヤウ	
	迸	*ヒヤウ	ヒン	ハウ	
勁	勁	ケイ		ケイ	
	聖	セイ		セイ	シヤウ ジヤウ
	性	セイ		セイ	シヤウ ジヤウ
	姓	セイ	シン	セイ	シヤウ ジヤウ
	政	セイ		セイ	シヤウ ジヤウ
	淨	シヤウ		シヤウ ジヤウ	
	鄭	テイ		テイ	
	復	ケイ		ケイ	
迴	俦	*ヒヤウ	ヒン	ヘイ	
	頂	*チヤウ		テイ	チヤウ チヤウ
	打	テイ	テン	テイ	タ チヤウ チヤウ
	酌	テイ	チン	テイ	
	定	テイ		テイ	
	鼎	テイ	チン	テイ	
	艇	テイ	チン	テイ	
	寗	ネイ	ニン	子イ	
	脛	ケイ キヤウ	イン	ケイ	
	馨	ケイ	キン	ケイ	
	並	ヘイ		ヘイ	
耿	併	ヘイ	ヒン	ヘイ	
	幸	カウ	アン	カウ	
径	徑	ケイ	キン	ケイ	
	磬	ケイ	キン	ケイ	
	汀	テイ	チン	テイ	
	倭	子イ	ニン	ネイ	
国字	堀	ヘイ	ヘイ		

【表2】に見られるように、『慶長版』の梗撰の場合、その132字が漢音と一致、7字が呉音と一致、12字が不一致である。以下、呉音と一致するものと不一致の漢字

を挙げる。

- a. 呉音と一致するもの: 「驚」「境」「孟」「請」「屏」「廳」「頂」 - 7字
- b. 不一致のもの: 「盲」「獐」「桜」「莖」「棚」「萌」「抨」「營」「頃」「并」「迸」「俚」 - 12字

まず、呉音と一致するものの場合、『倭玉篇』では、「驚」「請」「屏」「廳」の場合、「ケイ、キヤウ」(379-3)「セイ、シヤウ」(136-7)「ヘイ、ヒヤウ」(185-6)「テイ、チャウ」(364-3)となって、両方の音が出ている。また、「境」「頂」の場合は、「キヤウ」(19-1)「頂」「チャウ」(59-1)となって、呉音か漢音かは区別できないが、『慶長版』と一致している。なお、「孟」の場合、「マウ」(480-3)となって、『文明本』と一致している。

また、不一致字の場合、その中で、『文明本節用集』では見いだせなかったが、「莖」「并」「俚」「迸」「萌」の5字はそれぞれ「キヤウ」「ヒヤウ」「ヒヤウ」「ヒヤウ」「マウ」となって、これは呉音系と認めてもいいものであると考えられる。また、「盲」「棚」「營」「頃」「抨」の5字は「ハウ」「ハウ」「エイ」「ケイ」「ハウ」となって、これは漢音系と認めていいものである。ただし、「獐」「桜」の「ナウ」「イヤウ」は、今のところ呉音か漢音かはっきりしないものである。

3. 3 兩書の音形の分布状況

以下、『慶長版』右音注と『文明本節用集』における音形の分布状況を示すと、次の【表3】となる。

【表3】音形の分布状況

	直音		拗音		合拗音	
	聚分韻略	文明本	聚分韻略	文明本	聚分韻略	文明本
曾撰	コウ	グ コウ	キヨウ	キヨウ		
	ソウ	ソ ソウ	シヨウ セウ	シヨウ		
	トウ	ト トウ タウ	チヨウ テウ	チヨウ		
	ノウ	ノ ノウ	ヒヨウ ヘウ	ヒヨウ ヘウ		
	ホウ	ホウ	ヨウ	ヨウ		
	ケイ	ヲウ	レウ	リヨウ レウ		
梗撰	アウ エイ	アウ エイ	イヤウ	ヤウ	クワウ	

カウ	ケイ	カウ	ケイ		キヤウ	ギヤウ		
コウ		ケ	コウ	キヤウ	シヤウ	ジヤウ		
サウ	セイ	サウ	セイ	ソ	シヤウ	チヤウ	ヂヤウ	
テイ		テイ	タ	タウ	チヤウ	ニヤウ		
ナウ	子イ	子イ			ヒヤウ	ハアウ		クワウ
ハウ	ヘイ	ハウ	ヘイ		ミヤウ	ヒヤウ	ビヤウ	
マウ	メイ	マウ	メイ			ミヤウ		
レイ		レイ				リヤウ		

【表3】から両書の音形の分布状況を、『慶長版』を中心に見ると、まず曾撰の韻形は介音無しの場合は、「-oウ」直音、介音持ちの場合は「-oウ音」拗音となっている。また、『慶長版』の梗撰の韻形は、介音無しの場合は、「-aウ」直音、介音持ちの場合は「-eイ」型、イ長音や少数の「-aウ」拗音となっている。また、「クワウ」の合拗音が現れていることが注目される。ほとんどの場合、『慶長版』の音形は『文明本節用集』とほとんど一致しているが、曾撰「ケイ」、梗撰「ナウ」「イヤウ」は『慶長版』にしか現れていない音形である。これは、『文明本』ではそれぞれ「キョウ」「ニヤウ」「ヤウ」となっている。このように両書の音形において相違が見られることから、当時、呉音漢音の分類や仮名遣いにおいて一つに決まっていたわけではなく、宗派によって異なっているところもかなりあったこと示していると考えられる。

4. 『慶長版』の漢字音の系統

以下、『慶長版』の右音注と文明本節用集の呉音・漢音を比較した結果を示すと、次の【表4】となる。

【表4】『慶長版』右音注の系統

	漢音と一致	呉音と一致	不一致	計
曾撰	39字	0字	2字	41字
梗撰	132字	7字	12字	151字
合計	171字	7字	13字	192字
比率	89%	3.6%	6.7%	100%

【表4】に見られるように、『慶長版』と『文明本節用集』において漢音と一致しているものが全体で89で圧倒的に多く、呉音と一致しているものは3.6%で非常に少ない。なお、不一致も6.8%もあることに注目したい。

一方、前述したように、李承英(2007)は『慶長版』の右音注が五山系の抄物の呉音と一致しているものが21%もあることを述べている。この事実は【表4】の結果とかなり異なっている。これは、五山系の抄物の字音の系統が『文明本節用集』とも不一致のものが多かったことを考え合わせると、五山系の抄物は呉音漢音の認定の仕方において特殊だった可能性があることを示唆している。つまり、五山系の抄物は、呉音漢音の認定において『慶長版』『文明本節用集』とは別のグループにあったものと推定される。

奥村(1973)では、右音注の漢字音について、呉音漢音が入り交ざっているとしているが、このように漢音が圧倒的に多いのは、『慶長版』は韻書であることから漢籍を読むための漢音を積極的に表示している書であることを示していると解釈できる。また、『慶長版』と『文明本節用集』の両書ともに禅林によって編纂されているが、それぞれの韻形や仮名遣いにおいて不一致のものが多いことも注目される。

5. 終わりに

以上、『慶長版』の右音注を曾撰と梗撰を中心に、『文明本節用集』の呉音漢音と照らし合わせて、『慶長版』の音形や系統など、その実体を考察してきた。

その結果、『慶長版』の右音注は、『文明本節用集』の漢音と圧倒的に一致していることから、『慶長版』は当時の漢籍を読むため漢音を積極的に示している書であること、また当時一般に用いられている読書音を示していることが明らかになった。

また、『慶長版』と『文明本節用集』の両書ともに禅林によって編纂されているが、不一致のものも多いことは、当時、呉音漢音の分類や仮名遣いにおいて一つに決まっていたわけではなく、宗派によって異なっているところもかなりあったことが考えられる。これについては、当時の他の資料とも比較を通して、今後さらに明らかにしていきたい。

【参考文献】

- 有坂秀男(1957) 『国語音韻史の研究』三省堂
- 李承英(2007) 「『聚分韻略』の右側音注の漢字音の系統」 日語教育39
- 奥村三雄(1973) 『聚分韻略の研究付古本四種影印 慶長版総索引』風間書房
(1977) 『国語学研究事典』 「聚分韻略」明治書院
- 川瀬一馬(1937) 『古活字版の研究』安田文庫
(1943) 『日本書誌学之研究』大日本雄弁会講談社
(1955) 『古辞書の研究』筑波大学
(1970) 『五山版の研究』日本古書籍協会
- 来田隆(2001) 『抄物による室町時代語の研究』清文堂
- こまつひでお(1970) 「不濁点」 『国語学』80
- 高松政雄(1971) 「漢音—文明本節用集の検討—」 『岐阜大学研究報告(人文科学)』20
(1976) 「『呉音』の清濁」 『国語国文』45-11
(1977) 「『正音』の清濁一名義抄の性格の一面—」 『国語国文』46-1
- 中田祝夫(1971) 『古本下学集七種研究並びに総合索引』風間書房
(1983) 「日本の古辞書」 『古語大辞典』 「附録」小学館
- 西崎亨(1995) 『日本辞書を学ぶ人のために』世界思想社
- 松井利彦(1971) 「近世漢学における漢字音の位相」 『国語国文』40-5
(1976) 「近世前半期の漢字音の清濁」 『国語国文』45-1
- 吉田金彦(1971) 『講座国語史 3 語彙史』 「辞書の歴史」大修館書店
- 柳田征司(1998) 『室町時代語資料としての抄物の研究』武蔵野書院
- 湯沢質幸(1978) 「室町時代における清濁と呉音 漢音—文明本節用集を中心として」 『国語国文』46-2
(1987) 『唐音の研究』勉誠社
(1996) 『日本漢字音史論考』勉誠社

【資料】

- 中田祝夫(1970) 『文明本節用集研究並びに索引』風間書房
- 中田祝夫・北恭昭(1966) 『倭玉篇慶長十五年版研究並びに索引』勉誠社
- 馬淵和夫(1970) 『韻鏡校本と広韻索引新訂版』巖南堂

要 旨

本稿は、京都東福寺の臨濟僧、虎関師鍊(1278-1346)の撰述した『聚分韻略』の右音注の字音の系統を検討するために、呉音と漢音の対立が顕著に見られる曾撰と梗撰を中心に『文明本節用集』の呉音漢音と比較しているものである。その結果、曾撰の場合、『慶長版』の右音注は、不一致の2字を除くと、すべてのものが漢音と一致している。梗撰の場合も、その132字が漢音と一致、7字が呉音と一致、11字が不一致であることから、『慶長版』は漢籍を読むための漢音を積極的に表示している書と考えられる。『慶長版』と『文明本節用集』の両書ともに禅林によって編纂されているが、不一致のものが多くは、当時、呉音漢音の分類や仮名遣いにおいて一つに決まっていたわけではなく、宗派によって異なっているところもかなりあったことが考えられる。

キーワード：聚分韻略, 仮名音注, 文明本節用集 呉音、漢音、禅林

투 고 : 2007. 2. 28
1차 심사 : 2007. 3. 10
2차 심사 : 2007. 3. 31

住 所 : 경기도 수원시 장안구 조원동 675-4 조원샤르망501호
電 話 : 010-6764-0812
e-mail : sungyoungi27@naver.com